長野県コミュニティスクール検討会　発言要旨

日　時　令和6年3月7日(木)　午後3時30分～午後5時30分

場　所　オンライン開催

出席者　上沼　昭彦、河西　哲也、塩原　雅由、城村　義人、傳田　智子、早坂　　淳
伴　美佐子、堀田　茂樹

1 開会

〇岡田課長

ただいまから第2回コミュニティスクール検討会を開会させていただきます。進行を担当します文化財・生涯学習課長の岡田です。本日もよろしくお願いいたします。

ご参加の皆様におかれましては、年度末の大変お忙しいところ、出席いただきまして誠にありがとうございます。

本検討会は全体で5回程度を予定しております。第2回ではさらに、「なぜ」「何を」「どうしていくのか」についてご検討をお願いしていく予定となっております。

先般の第1回の会議では、「学校運営参画とは」いう根本的な問いから広くご意見をいただきました。本日は第1回の議論を踏まえまして、学校運営参画の意義について、具体的な視点をもとに、ご意見をいただき、今後の検討会の土台作りをいただければと考えております。
どうぞよろしくお願いいたします。

それでは協議に入りたいと思います。進行につきましては、早坂座長、よろしくお願いいたします。

2 協議

〇早坂氏

皆さんこんにちは。引き続き座長を務めさせていただきます。長野大学の早坂でございます。第1回の議論は、それぞれ皆さん、ご自身の立場やご見識に基づいて、建設的な根本のところに立ち返った本質的な議論が展開されました。お陰様でございました。

当初この座長を引き受けるとなったときは、荷が勝ちすぎるなとドキドキしていた私でございましたが、第1回の議論を踏まえて、今日が、ちょっと楽しみな気持ちで迎えさせていただいたのは皆さんのおかげでございます。ありがとうございます。

さて、本日の会議ですけれども、2時間みっちりと皆さんと議論をしてまいりたいと思います。

それぞれの立場で、前回の議論を踏まえて、こんなことをもっと伝えたいんだという思いが皆さんの中にあろうかと思います。余すことなく皆さんのご意見を引き出していかれるよう、私も精一杯努めたいというふうに思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは次第に従って、会議を進めてまいります。まずは事務局からご説明をお願いできればと思います。

〇事務局説明

よろしくお願いいたします。

出席者の皆様にお配りさせていただいている資料の確認をさせていただきます。次第、出席者名簿、事務局説明資料となっております。

それでは、事務局より、第1回コミュニティスクール検討会まとめについてご説明させていただきます。画面を共有させていただきます。

第1回検討会でいただいたご意見を大きく分けさせていただくと、三つに分けられるかと思います。「学校運営参画とは何か」「学校運営参画の実情」そして「参画をどう進めていくのか」の3点です。

学校運営参画とは何かでは、参画と参加の違い、地域住民が学校運営に参画する意味についてご意見をいただきました。具体的には、参画は参加よりも主体的な関わり、自分ごとがより強い意味合いと捉えているといったご自身の捉えを発言していただいたことを皮切りに、地域学校協働活動における子どもたちの自己有用感を伴った自尊感情を高める仕組みとしての価値、良い地域が良い学校を作る、良い学校がよい地域をつくるといった好循環を作っていくことが、コミュニティスクールにおける可能性なのではないか。といったご意見をいただきました。

また、学校運営参画の実情では、現場で推進している皆様から、地域住民にどの領域まで参画いただくかといった迷いや、学校側の不安感、負担感についての率直なご意見もいただきました。

学校運営参画に対する学校とボランティアの間に、活動の温度差、温度感のギャップを感じるときがあるといったご意見や、学校運営参画のどの部分に参画いただき、どんなご意見をいただくかには、各学校の地域、各学校や地域の実情の違いもあり、難しさもあるのではないかといったご意見もいただいております。

また、学校運営に参画するとはどういったことなのか、地域連携といっても、実際に何をやっていくのか、見通しの持ちづらさやわからなさは不安に繋がり、不安であるがゆえに、地域連携を負担に感じることもあったといったご意見もいただいております。

持続可能な地域連携の視点として、学校も地域も無理をしすぎないことが大切といったご意見もいただいております。

また、参画をどう進めていくかでは、そもそも参画なのか、参加なのかといったご意見もいただいております。参画をどう進めていくかについては、CSに関わる大人、学校の先生方がみんなで同じ目標に向かって進んでいくためにも、学校経営学校長の経営ビジョンが必要であること。

経営ビジョンに絡めて、信州型から国型に移行することによって、校長先生のマネジメント力が高まり、皆が納得できる経営ビジョンの提示ができるようになったといったご意見もいただき

ました。また、ビジョンを共有する場を作り、議論を通して、地域、学校の両者が変わっていくことが、子どもの教育を充実させていくといったご意見もいただいております。

スタートは参加であっても、協働活動や、運営委員会運営協議会での話し合いを繰り返していく中で、だんだんと階段を上がっていくように参画の方向に進んでいくのではないかといったお考えや、学校長の悩みに応じたビジョン作りの場に、コミュニティスクール関係者が参加するようになることが、参加から参画に繋がっていくのではないかといった具体的な方法についてもご意見をいただきました。意見交換の終盤では、地域や産業界といった側が子どもと学ぶことによって変化が起こっていること。様々なステークホルダーがリアルにどう感じ、どう変化が起こってきたかについての意見交換も、ご意見をいただいております。

前回YouTubeライブをご覧いただいた方からは、地域とは誰を指す言葉なのかといったご質問もいただいております。振り返ってみますと、学校地域、行政、といった言葉だけでも、様々な感覚、関係者がいることが考えられます。

最後に本課として、課題感についてまとめさせていただきました。

第1回でもご意見をいただいた学校運営参画ですが、より噛み砕いて、「誰にとって」「どんな意味があるのか」について、ご自身の立場から更に焦点化し、ご意見をいただければありがたいと思っております。

また、学校運営参画についての不安感や負担感については、前回は学校の立場から多くいただきましたが、学校だけでなく、コミュニティスクールに関わる大人にとって、どんな負担感、不安感があるのか。また、ありそうなのか、ご意見をいただければ大変ありがたいです。

私の方からは以上です。

〇早坂氏

ご説明ありがとうございました。

前回第1回委員の皆さんからいただいた実に多様で本質的な議論を非常にわかりやすくコンパクトにおまとめいただきました。

今日は、今ご報告いただいた第１回のまとめ、振り返りを一つの足がかりにしながら、それを次のステップに一歩踏み出していけたらと思っております。冒頭、事務局からもご報告ご説明があったように、このコミュニティスクール検討会は全5回を検討会の回数として概ね設定をしていて、今日が2回目、そして前回と今日の2回でそもそも論のところをしっかりと、本質に立ち返って議論をして、それぞれ立場が違う委員がその立場を超えて議論できる、対話できる土俵を作っていこうというのが狙いになっております。

今回も前回に引き続いて、それぞれのお立場からまず思っていること、感じていること、伝えたいと思うこと、大事だと思うことを出していただく。まずここを基本にしたいと思います。

第1回の議論でこれも良かったなって思うことがいくつかあるのですが、やはりそもそもに立ち返れたというところ。つまり、学校運営参画って何がいいのとか、誰にとっていいのっていう、学校運営参画の理解ありきで進もうとしていたところを、1回立ち止まって、そもそも学校運営参

画ってどういうことなのかいうところに議論を立ち返らせることができた。これ私はとても大事だったかなと思っています。

これが遠回りに感じるときもあります。もっと早く本質に入りたいとか、もっと早く制度の中身の議論をしたいとか、特に実践に身を置かれている方はそういった思いももしかしたら少なからずあったのではないかなと思うのですが、私は逆に近道になるのだと思っています。

我々の共通認識をしっかり持つこと、土俵をしっかり作っておくこと、これが私達の議論は空中戦ではなくて、しっかりと地に足をつけた相撲に変えていける秘訣なのだろうと思います。そんな点では、前回、傳田さんからいただいた「学校の参画って何」というそもそもの疑問はとても大事なきっかけになったという印象をとても強く思っています。

今回、どの観点からでも「そもそもこれってどういうことだろう」ということがあったら、議論の流れに関係なくどんどん出していただけるとありがたいと思っています。

さあ、早速議論に入っていきたいんですけれども、論点は事務局からご説明いただいたように２つあるかなと思います。

資料の最後に提示された「学校運営参画が誰にとって」この「誰に」です。

YouTubeライブご覧になった方からのご質問にもあったように、私達が普段使っている言葉、地域とか学校というのはちょっと使い方として乱暴かもしれないですよね。地域と言ってもいろいろな人が住んでいます。それは、保護者なのか地域住民なのか地域にいる企業なのかNPOなのか、大学のような教育機関のことを言うのか、そこの「誰」っていうところの解像度を上げるというか輪郭をはっきりさせることを今日ちょっと試みてみたいなと思っています。

概ね、地域と学校がまず大きなステークホルダーとしてはあるわけです。地域と学校、そこに当事者としての子どもがいるわけですけれども、学校と言っても、学校の中にはいろいろな先生がいらっしゃいます。管理職の先生の立場からコミュニティスクールを考えるとこうなるというのもあるでしょうし、地域連携を進めている先生からすると、というところもあるかもしれません。「誰に」というところの輪郭を少しはっきりさせながら議論していきたいというのが今日の論点の一つかなと思います。

もう一つは、前回学校教育の立場からいただいた率直な思い、議論を展開する上で大事なきっかけになったと思っているのですが、様々な形で学校運営参画が子どもたちに総合効果をシナジーを起こしていることを現場からご報告をいただきました。それと同時に、学校には実は不安もあるのだと。

どういった形でどこまで参画していただくのかについては正直わからないことも多いし、わからないことは不安になるし、不安や迷いというのは、負担感に繋がっていく原因にもなりうるという意見は、とてもハっとさせられるご意見だったなと思います。

多様な機関が連携協働して子どもたちを一緒に育てていくんだっていう、社会総がかりの教育というか社会に開かれた教育課程というか、地域とともにある学校作りは、いろんな呼び名がありますけれども、地域と学校が一緒に何かをやっていくことそのものについては、多くの方が良

いことだと賛同していただけるとは思うのですが、実際にそれを回していこうとなると、現場レベルで出てくる不安や迷いや負担感は決して看過することができないものだと思います。

ここをどうやって乗り越えていったらいいのだろうっていうのが今日の二つ目の論点です。正直よく分からない地域との繋がり、その地域と繋がりの中で、分からなさをどう乗り越えていって信頼、あるいは協働に繋げていったらいいのか、このあたりが2つ目の議論としてできるととてもありがたいなと思っています。

私が喋りすぎてもいけないので皆さんにバトンを渡したいと思います。

まず1個目の論点として、前回に引き続き学校運営参画って、誰にとっていいことなのっていうことを子どもにとっての良さは前回、現場の学校教育現場の方からお話をいくつかいただきました。今日もし追加であれば、そのあたりをお話しいただけたらありがたいなと思います。

また、不安や迷い、それが負担感になってしまう学校現場からして、コミュニティスクールっていうのは一体どんな良さがあるのか、ここもぜひ議論していきたいです。また地域にとっても同様で、具体的にそれぞれの言葉の意味する範囲をはっきりさせながら、何がいいことなのかについて、まずは議論をしていけたらと思います。

〇城村氏

PTAの城村です。

前回は本当に学びをいただきました。ありがとうございました。

自分が見ていたところとまた違うところからの光をいただいた気がしています。感謝します。

座長の早坂さんから話がありましたが、遅々として進まないということが現状として特に教育現場にあるかなと思います。PTAもやっぱりそうです。やはり課題があってすぐに解決してほしいというニーズは確かにあるんですが、やっぱりそれが、遠回りだけれど近道だっていうのは、早坂さんがおっしゃっていること、私もそう思っています。

地域住民というところでまず話をしたいのですが、先日PTAの方々といろんな話をしたときに、学校って地域にとってお城みたいだよねって話になったんですね。

それはお殿様がいて、この町をどんなふうにして作っていくのかまち作りしていくのかっていう方向性が示されたり、あるいは災害や問題が起こったときにはみんなが城にすぐ駆け込んでくる、みんなで守っていくという。何か学校ってそんな役割なとこがあるよねっていう話がありました。

なるほどねと思いながら僕自身聞いていたんですね。地域住民にとって学校運営参画って何が大事かってなったときにいくつか大事なことがあると思うのですが、まずコミュニケーションです。質と量でよく言われますけれども、やっぱり質、良質なコミュニケーション、そして、それなりの量のあるコミュニケーションがあって、いい関係を築かれていくと思います。また、そこが不足するときに様々なところでの問題・課題が出てくるのかなと個人的に仕事していても思っています。

地域住民にとって学校の運営参画っていうのは、繋がり続けることがすごく大事じゃないかなと思っています。議論が一つ前の話になるかなと思うのですが、自分たち地域住民が関わってもすぐに変わらなかったとしても関わり続けることの大事さっていうんでしょうか、以前、仕事の関係で、東大教授で社会学の先生である玄田先生と対談させていただいたことがありました。希望学の先生です。希望とは何かという研究されている先生でとても面白かったです。先生が言われていたのが、希望っていうのは弱い繋がりなのだとおっしゃっていました。
それはあの3.11の震災があったときに、すごく絶望の中に打ちひしがれる人々が何に希望を見いだしたかというと、普段はそんなに関係があるわけじゃない、強い繋がりがあるわけではない。でも、困ったときにこの人がいるあの人に相談してみようこんな場所があるっていう、何かそんな繋がりがあることが、その人たちの希望に繋がっていたそうです。先生はそれをウィークタイズ、（ネクタイの弱い部分、結び目）と先生は表現していましたが、それはすごく大事な視点かなと思っています。では、この学校運営参画となったときにすぐに何かができるってことは素晴らしいのですが、仮にできなかったとしても地域住民として学校に関わり続ける、学校も地域住民と関わり続けてくっていうことを通して地域が作られていく。住民にとっても子どもたちにとっても幸せのコミュニティが作られていくのではないのかと感じています。
早坂さんのおっしゃったようにすぐに解決できなくても、答えが出なくても、そこは大事だよねというのは、私もそう思っていて、何かそういった繋がり続けるっていうところは、まず、そもそものベースとしてあっていいのかなと思っています。
以上です。

〇早坂氏
城村さん、議論の口火を切っていただきありがとうございました。PTAの立場から地域についてお話をいただいたところです。
せっかく地域のテーマでお話をいただいたので、一旦地域を深掘りしてみたいと思います。そうすると必然的に子どもの話が出てくると思うので、その後、子どもにとって学校運営参画って何がいいのだろうという形に自然と流れていくかなと思います。
おそらく最後は今回、城村さんから言っていただいたお城としての学校。まさに本丸に議論が突入していくという流れを今作っていただいた、そんな思いです。
繋がり続けることの重要さというところで、今、地域の立場から、学校との繋がりの重要さをご提案いただいたところでございます。
他に地域のお立場で、学校運営参画の良さ、学校運営参画や地域にとってどういう良さがあるのか、意義があるのかというところで、何かご意見がある方いらっしゃったらお願いできればと思いますがいかがですか。
〇上沼氏
地域ということですので、公民館の立場で少し発言をさせていただければと思います。

今、繋がり続けることの大切さの発言がございました。私もまさにその通りかと思っています。

飯田市の場合は公民館が地域と学校をつなげるコーディネート役を担うという形で、コミュニティスクールの充実を図っていますが、普段、取り組んでいく中で、学校の先生も、公民館の主事職員もどうしても数年で変わってしまいます。せっかくを積み上げていったものが担当している先生や主事が変わることによって、例えばなくなってしまったり、うまくいかなくなってしまうのは非常にもったいないし、悲しいことだと思います。ただ、地域は変わらず、ずっと関り続けることができます。地域の中で関わる方は当然その中で、地域の中でも引き継がれていく形になると思うのですが、繋がり続ける意味では、地域の持っている力みたいなものはすごく大事になってくるのだと思います。

あと、地域が学校運営協議会に関わることのメリットは、地域のいろいろな人たちが、今、学校の統合を取り巻く状況がどうなっているんだろうとか、子どもたちを取り巻く状況がどうなっているんだろうということを把握することができる。一緒に考えることができる。そういう場があることは、地域が関わっていく上ですごく大切になってくるんじゃないかなと思っています。

〇早坂氏

ありがとうございました。

前回もう少し私から上沼さんにもっとお話を振ったら面白い話がきっと出てきただろうという反省もあって、2番手にご発言いただけて大変ありがたいです。

今、城村さんからのお話を受けて、公民館というのはまさに繋がり続けるためのコーディネーター役であるし、地域と学校が繋がるための一つの場所、きっかけにもなりうるんだというところ。ただ、学校も公民館も地方公務員の立場にある方は異動があります。いわゆる風の人っていうことで、定期的に入れ替わっていく。そこでやっぱり地域の人、つまり、木の人の存在が大きくなるってことですかね。

ちなみにこの風が吹かないときっと木も育たない、新しい風が吹いてこないと木もきっと空気がよどむってところもあるでしょうし、風ばっかり吹いても木が育たないっていうことでやっぱり両方が、うまく繋がっていく必要がある。そして、その繋がっていく上では、公民館っていう場所は、特に長野は公民館の数が全国的にみても非常に多い地域として知られているので、長野でコミュニティスクールを展開していく上で、公民館っていう存在は欠かせないだろうなと私は個人的に思っています。

上沼さんもうちょっと踏み込んでぜひ教えていただきたいのは、公民館が果たす可能性の部分、学校と地域を繋いでいく場になるというお話もいただいたところですが、もし、何か具体的な実践事例で、こんな面白いことが公民館でできるんだよということがあったら、地域の話題をせっかく深掘りしようとしているところなので、少し私達に新しい光を当てていただけるとありがたいのですが、いかがでしょうか？

〇上沼氏

今、主に公民館の取り組んでいる発想としましては、やはり子どもたちに自分たちのふるさと地域のことをしっかり知っていただきたい。理解してもらいたい。愛着と誇りをもってもらいたいと思っておりますので、子どもたちを対象にした地域の歴史ですとか文化ですとか自然ですとか、そういった資源を活用した学習活動を積極的に展開しています。公民館の強みとしてはやっぱり地域にどのような人材がいるっていうことをある程度は把握ができていますので、こういう学習テーマについてはこういう人とやるといい学習ができるんじゃないかとか、例えば、学校からニーズがあったときにこういう人を紹介して繋げてあげると、学校が望んでいるような学習ができるのではないかとか、そういったところの可能性は大いにあるかと思います。

例えば学校運営協議会で目指す子ども像を実現するためそれを地域がどうやってそこを支えていこうか、実現していこうというときに、公民館はそれに向けた取り組みなんかもできたりするんですよね。

例えば、学校運営協議会は本当に地域や学校や保護者の代表者の方しかいらっしゃいませんけども、公民館がもう少しそれを広げて、地域の中でも、もう少し関わる人、子どもたちに興味関心がある方ですとか、住民の方で課題意識をもっている方ですとかそういう方を集めて、保護者や学校の方からも人を出してもらって学校運営協議会とは別に、地域の子どもたちのことを考えたりだとか、その目指す子ども像の実現のため我々は何ができるんだろうかと語り合う場、学び合いみたいな機会も設けている地区もあります。それで公民館が関わることができるんじゃないかなと思っています。

〇早坂氏

ありがとうございます。今後の議論にすごく大きな議をいただいたような気がします。というのは、学校運営協議会にはごく一部の、まさに地域の代表の方しか入っていないというところがまず前提にお話ありました。

教育委員会規則でそれぞれ人数が定められているので自治体によって違うのですけど、8人から22人で平均15人ぐらい学校運営協議会のメンバーがいるわけですけれど、PTAの会長さんとか民生委員の方とか、あとはコーディネーターの統括をやられている方とかもまさにその地域の顔の方が集まってくるわけです。その方の活動ってその方個人がやられているというよりは、その方とともに一緒にやっているメンバーがいて、そういった人たちはどこにいるのか、どこに行けばアクセスできるのかっていうと公民館がそこを把握しているってことですね。

学校運営協議会の機能が高まる。山でいうと山の高度が高いってことは、山の裾野が広いっていうことでもあるわけです。その裾野の広さがどこにあるかと言ったら公民館にあるんじゃないかというのが、上沼さんのお話を伺って、今後の議論に何か非常に大きなきっかけになりそうなポイントだなと思いました。ありがとうございました。

もうちょっと地域について掘り下げていきたいと思うのですが、子どもと絡めながらでも構わないのですが、学校に地域の方が入っていくことが、単に学校のためだけじゃなくて、要は自己犠牲で入っていくだけじゃなくて、お手伝いでもなくて、入っていく地域住民にとってもいいことがあるんだっていう観点、私はとても大事なポイントなんだろうなと思うのですが、そこと絡めて話題提供していただける方がいたらいかがですか。

〇傳田氏

本当にそもそも論のそもそも論からちょっと課題提起というか皆さんと共有したいなと思っているので、画面を共有させていただきます。

これは私達が事務局をさせていただいている郷土愛プロジェクトという産学官であったりいろんな人がプロジェクトメンバーになっていただいて、地域を繋いでいく活動の全体像なのですが、その中で皆さんのご意見を聞きたいなと思っていることがあります。

基本的な考え方がすごく大事だったり、もしくはそれぞれの考えがあることが大事なんじゃないかなと思っています。

社会を担う次世代を誰が担うかというあたりなのですが、これは私の考えであって分かりやすくするために極論のようにまとめてあるので語弊があるところもあるかもしれないんですけれども、社会を担う次世代っていうのを、学校や保護者がこういうふうに担うというような、全体像というものなのか、それとも次世代の社会、保護者や学校を含む社会の多様な大人が担おうという前提に立つのかというあたりが結構大きく、すごく大事な部分になると私自身は感じています。

未来を考えると、今まで子どもだった子が、いずれその次の世代になって、社会を支えていく立場になります。それを考えると、子どもたちは、保護者や学校が支える人になるわけではなくて、子どもたちは多様な社会を支える人になっていくっていうことが、大前提じゃないかなと私は思っています。

ですので、次世代を育てるっていうのは、もちろん学校や保護者の皆さんが頑張っていることが前提にあるのですけれども、多様な大人が関わるっていうのが自然なことなのではないかといろいろな活動をしている中で感じています。

先生方のお話の中でも、自己肯定感とか、自己有用感ということをこの前もおっしゃっていただいていたと思うのですけども、これも極端に書いてあるのですが、例えば子ども時代に保護者、それから学校が中心に関わっていただいて大人になるっていうことと、先ほどのように多くの大人が関わって大人になることで、子どもたちの成長だったり生き方が大きく変わるのではないかなと感じています。

では、大人側の視点に立ってみるとどういうことなのかということを私はいろいろな場面で見させていただいています。活動に参加された皆さんからの感想で共通する部分で感じられたところをピックアップさせていただくと、子どもと大人が関わる機会がないっていうような、今、問題というかそれは保護者や学校が中心だった場合、なかなか接点がそもそもない。

しかもコロナということで、大人側の自己肯定感というかモチベーションというかやりがいというか、さらに深いいろいろな学びというのが生まれにくい状況があるのではないかと感じています。

また、今、長野県のすごく問題にもなっていると思うのですけれども、若者の憧れる職業は、いろいろあると思うのですが、それは知っている職業から選んでいると思います。ドラマだったりインターネットだったりYouTuberとかもそうなんですけれども、そういったことの中で、本当に私達の生活を支えている地域文化だったり産業の担い手が不足しているというのは本当に大きい課題になっていると思います。

先ほどからも、逆に若者から学ぶということもあるという話題もあったと思うのですが、就職後のミスマッチということもすごく起こっていて、こういった大人側の感じている課題に対して、もっと早い段階で大人たちが関わることによって、大人が本当にいろいろ関わってくださっているのですけれども、授業とかでも。話すことによって、皆さんこう言ってくださいます。またやりたいです。すごく勉強になりましたということで、地区講演会というよりも講師になっていただく講演会的ワークショップの方が本当に多くのリピーターの社会人の方が来てくださっています。それは意義があるからなんですよね。

先ほどの担い手不足というところもあるのですけども、知らないから選ばない。人の繋がりがないから選ばないというようなところで考えていても、主体的な選択の幅が広がるというようなことがある。それは大人や地域にとってもすごく有意義なことになるのではないかということと、若者も多様な意見や考えをしているということと同時に、大人も若者は育ってきた状況とか考え方を知るということの中で、すごく充実した社会活動が展開できるのではないかなということで、ざっくりまとめたところなんですけども、子どもと大人にとってもすごく重要なことがあるなと思っています。

皆さんの方で地域って誰よっていう話があったと思うのですが、ステークホルダーとしては子どもと家庭と学校と地域と産業界と行政というように、私達のプロジェクトはさせていただいているのですが、学び合いはそれぞれのステークホルダーの方にとってもすごくいいっていうような事例が見えてきています。

さらにもうちょっとお伝えさせていただくと、その中の産業界と言っても、今日の構成メンバーの方も、公務員と括られる方が多かったり、学校現場は多いのですけれども日本の雇用者全体の割合で、公務員でさらに学校教員の方々とか、特に教育に関わる方というのはさらに割合が減ってくるんですけども、95%は民間の方と考えたりすると、今、産業界の皆さんの力が多様な次世代を育成していくという点ではすごく必須ではないかなと考えています。

同時に今は共働きの世帯というのが少なくなっているのも実態で、先ほど地域と言ってはいるけれども本当に地域に今、誰がいるの、どういうふうに関われる人がいるのというのも、本質的な議論ですごく必要になってきているのだと思っています。そういった面でも、これから何らかの方法でいろいろな人が関わる仕組みをこのコミュニティスクールでも考えていっていただきた

いということが私が思っているところです。いろんな観点をお伝えしてしまいすいませんがよろしくお願いします。

〇早坂氏

傳田さんありがとうございます。ちょっと共有を解かないでそのままにしておいてもらっていいですか。今、傳田さんからは、具体に踏み込んだ地域にとって何がいいのかという点すごく大事なことを私の中で三ついただいたと思っています。その三つを皆さんと改めて共有した上で次の議論に行きたいと思うのですが、傳田さん、スライド前の方に戻っていただいていいですか。2枚目ぐらいだったかと思うのです。

この左側なのか右側がいいのかっていうのは、よくありますよね。要は学校がこれまで教育の責任を担ってやってきた教育のスタイルとみんなでやっていくという地域とともにある学校作りがいいのかという、これは教育学的には何て言われているかというところをちょっとご紹介したいと思うのですけれど、教育学的には教育学というのは文化的なあるいは歴史的・時代的・地域的な変数によって良さが変わるというのが学問の特徴なので、つまりいつどこでどんな状況でこれを議論するのかということによって善し悪しが変わるというわけなんです。

①番、左側の学校と保護者中心の教育が実は良かった時期もあるんです。どういう時期かというと、答えがクリアだった時期。子どもが身に着けなければいけない資質能力が明らかで、子どもができたら、その後、学校で身につけたことが子どものウェルビーイングに直結するような社会というのが実は学校ができてからしばらく長いことあったんです。私達の国は。要は、明治維新が終わった後ぐらいの、西洋に追いつけ追い越せみたいな正解があった時期というのは、子どもたちが村ごとにバラバラなことをやられていると困るので、国民として統合していくということがやっぱり学校の大きな大きな目標だったわけで、そういうときはできるだけいろいろ人を絡めない方がいいんです。いろいろ価値観が入るとバラバラの子どもができちゃうので、できるだけ国民として粒が揃っている方がいいわけです。となると、保護者と学校中心が良かった時期もあります。

だけど、今の時代どういう時代かというと、どこに答えがあるんだという時代ですよ。何を信じれば、どこを目指せば子どもが幸せになるかは子ども次第です。そうなってきたときに正解をもっている大人の背中をどれだけ見せられるかというのが学校の役割に変わってくるわけです。俺の言う通りやっときゃ大丈夫だよともう言えないんですよ。学校は。地域も親も可能な限り多様な人たちに触れさせて、どこに正解があるか分からないけれど自分で選べというのがこれから先、子どもに求められることになるとすると、今、左側をやっている場合じゃないというのが教育学のある種、時代的・地域的な変数が大きく変わっている中での１つの答えかなと思ったりしているところです。これが1個目で、その次のスライドもまたすごく興味深いです。次のスライド見せていただいていいですか。

自己肯定感、自己重要感のお話がありました。前回も学校の立場から、河西さんからもお話をいただいて、地域の方にすごいなとか褒めてもらうことで、学習のフィードバックをすごくたく

さんいただいて、教員が褒めるよりも、親が褒めるよりも、子どもにとって与えるインパクトがとてつもないんだってお話ありましたけれども、これは結構データでエビデンスがしっかりあって、要は子ども時代にできるだけたくさんの人に関わり合いながら生活すると子どもに何が起きるのかというのは、こども家庭庁の前身の内閣府がやった調査で、子どもが多様な大人と関われば関わるほど、子どもの持っているチャレンジ精神とか自己有用感とか自己肯定感が右肩上がりに伸びていくというデータが出ているんです。これは日本だけじゃなくて世界的に見える傾向で、可能な限り、学齢期に多様な人たちに触れさせることで、非認知能力、要は子どもの生きる力を下支えする力ですよね。その力が上がっていくことは、調査を見る限りは明らかなので、多様な人と共に育てないという理由が逆になくなってきています。

公務員の数というところで言うと要は子どもを支えている人が本当わずかなパーセンテージだということと、産業界でも皆さん働きに出ていってどう支えるのかというこの問題。ここはすごく突き刺さるような論点の一つかなというふうに思います。

これを前提に、地域と学校はどうやって協働できるのかということを考えていかないといけないのが、今この現代日本に生きている私達の課題なのかな。そんなふうに教えていただいた思いでございます。

傳田さん今日のために資料作ってくださったのですね。ありがとうございました。

〇傳田氏

はい、今日のために限らず、ずっと説明していることなので、今日一緒に考えられてとってもすっきりしてきて嬉しいです。ありがとうございます。

〇早坂氏

ありがとうございました。引き続き前回に続いて本質的な部分でお話をいただきましてありがとうございました。さあ、もう傳田さんの議論は地域にとって何がいいのかというところから子どもにとって何がいいのかという議論に入ってきていますね。たくさんの大人が関わることで、要は繋がりの中で子どもが生きていくことで子どもの自己肯定感、有用感、チャレンジ精神のような非認知能力が右肩上がりに上がっていくんだというエビデンスも背景にしていくとなると、やはり地域の人が入っていくことが地域の人の自己成長にも当然繋がるんだけれど、子どもにとってもやはり大きいというとこで論点を、子どもの方に若干シフトさせながら、さらに盛り上げていきたいなと思っています。傳田さんありがとうございました。

子どもにとって学校運営参画、地域の方が学校へ参画をしていくことの良さというところで、何か今日お話をいただける方がいらっしゃったらと思うのですが、学校現場の方でもいいですし、また地域の方でも構わないのですが、いかがですかね。

河西さんお願いできますでしょうか？

〇河西氏

前回もお話しましたし今もお話出てきましたけれども、とにかく地域の人と関わることによって、得られるプラスのフィードバックによって自己有用感が高まり、それをもとにした自尊感情

が高まる。これはおそらくは次への意欲に繋がるということなんですよね。その子どもたちがなぜ学ぶのかという、学習のエネルギーが一体どうやって生まれるのかとか、いうことを体感する機会になるんじゃないか。子どもたちにとって地域連携における最大のメリットはそこにあるかなと私は考えます。
以上です。
〇早坂氏
　ありがとうございます。とっても本質的なことをむちゃくちゃコンパクトに言っていただいて、ありがとうございます。何かすごくハッとさせられました。今の言葉。
子どもたちが地域の人たちと関わる中で、子どもたちの自己肯定感、有用感、非認知能力が上がっていく。それって結局、次の学びの意欲に繋がるんだっていうね。学力の3要素って私達よく言う、その三つ目の要素、子どもの持つ人間性とか学びに向かう意欲というところは、どうやって育てていくのか非常に難しい課題ですよね。
　大学でも、私はそれは大きな課題の一つだなと常日頃思っているわけですけれども、これは地域と人との関わりがあってこそ生まれるものだとすると、教育課程そのものをやはり地域の方をどんどん巻き込みながら、一緒に授業をやっていくことがどれだけ子どもにとってメリットがあるのか、そこを改めて今強調していただいたかなと思います。ありがとうございます。
他はいかがでしょうか。子どもにとってのメリットというとこでいくと、伴さんお願いいたします。
〇伴氏
　先ほどそれぞれの委員の皆様から素敵な言葉をいただいて、例えば城村さんからは希望学の話。私はまさに学校がというか子どもが私達にとっての希望なんだなって、それを育ててもらっている学校というのは、私達にとって希望の場所なんだなと思っています。画面を少し共有させていただきながら私の道のりを、お聞きいただいてもいいですか。
　私の関わっている上田市立北小学校では、実は学校の中に2020年にコミュニティルームというのができて、そこで活動が始まってからは10年近くになるんですけど、2020年にコミュニティルームができたことで、大人の学び、学校の中に大人のための公民館を作っていただくようになりました。
　そんな中で大人が生涯学び続ける背中を子どもたちが日常的に目にするようになりました。コミュニティルームでの様子なんですけど、こんなふうに大人たちが日常的に学ぶようになりました。これはGIGAスクールが始まると子どもたちがパソコンを使って1人1台のタブレット端末を使ってどんな授業をしているのかとかを学び始めたり、そうこうするうちに子どもたちが、大人が楽しそうに学んでいると様子を見に来るっていうようなことが始まりました。
　今年度から学校運営委員会に児童会のメンバーが参加できるようになりました。学校運営を子どもたちも主体的に、学校がこんなふうになってほしいということを大人たちと一緒に考えるようになりまして、そういうことをすることで、子どもたちがどんどん変わっていきました。

今年、山口県と兵庫県とそれから長野県内では、上田市立北小学校だけが参加したコミュニティスクールのアンケートなんですが、子どもたちが日常的に大人の頑張ってくれている姿を見かけるようになると、子どもたちの中に地域の将来を自分たちの手で元気にしたいっていう意欲があふれるようになりました。

何を言いたいかというと、子どもたちは支援される立場の人間ではなくて、一緒に学校を作っていく仲間なんだという、そういう体験をし始めたら子どもたちは主体的に地域のことを考えられるようになってきたっていう話です。

〇早坂氏

伴さんの今のお話で私達が、この後の議論にしっかり引き継いでいかなければいけないポイントは、最後に伴さんがおっしゃった子どもは支援される立場だけに終わらないんだ。大人は支援して終わるんじゃないんだ。教える立場だけではないんだ。大人も学ぶし、子どもも一緒に学校を作るんだという関係性のこれまでの非対称性があったわけじゃないですか。大人が教える子どもが受け取るという。大人は自己犠牲で頑張って子どもが関係性の並立対等性ってよく共同を語るときに理論的に言ったりするんですけれど要は私達が何か新しいものをみんなで作っていこうとするときというのは、関係性に横並び性というのがすごく大事だというこの縦の関係じゃなくて、横の関係、年齢や知識や、これまでの経験や経歴はそれぞれバラバラですけれども、みんな横並び。子どももももちろん横並びですね。

なんだったら、まだ生まれていない将来世代も横並びに、仮想的に置いて議論するみたいなことがすごく大事と最近よく言われていますけれども、それを実践されている。伴さんのご発言、ここはしっかり次の議論に生かしていきたいなと思ったところです。子どもは支えられるだけじゃないんだぞというところですよね。

1個だけごめんなさい。時間ないって言いながら伴さんに早口で喋らせておきながら、これをちょっと皆さんと共有したいと思うことが今、伴さんに教えていただいたことで、1個出てきているんです。それは何かというと、教員志望の人間はどういう人なのかということなのです。なんでこんな話をするかというと今、全国で教員を志望する人の数が減っていて、教員採用試験の倍率がなかなか厳しいことになって、学校が人手不足になっている。みたいなお話がありますよね。学校は今後も引き続き教育の核であることは変わりがないと思うのです。そこにもっと地域が入って多様になるにせよ、学校、ここの最前線が崩れてしまうと私達の国が崩れる。ここには能力のある若い人がどんどん教員になりたいって飛び込んでいかないといけないんですよね。

だけど、今その数が減っています。減っている理由は働き方改革が進んでないとか、ブラックだと言われると表層的な議論じゃなくて、もっと根本のところに私はあると思っているんです。

大手予備校とか就職情報サイトがやっている研究機関が出した論文等を読むと、教員志望の人というのは地元志向がとても強いことが知られています。つまり、地元に帰って恩返ししたいという思いをもっている人間が教員になりやすいんですよ。その思いがないと教員になろうというインセンティブが湧いてこない可能性があるんです。地元に戻りたい、恩返しをしたいと思う人

はどういう人かともう1本さかのぼると、学齢期に地元で育てられた人だということが分かっているんです。

これを踏まえると幼い頃から地域で育てられた人は地元志向が強くなって地元志向強い中には教員志望が出てくるんですよ。また、教員の最前線を今、支えてくれる次の世代が出てくるということなので、北小学校を卒業して学校の先生になって、また地域を支えるなんて子がね、実際見てきているんですけどね。そういう循環が何かちょっと見えたような気がいたしました。

他に子どもに関して今、伴さんのご発言から触発されてというところでも構わないんですけれども、学校の参画に関して子どものメリットというとこで何かご発言いただける方がいらっしゃったらお願いできればと思いますがお願いします。

〇堀田氏

今のお話を聞いていてまさにそうじゃないかなっていう、うちの実践を通して、そこだっていうことがあったので、ちょっとお話をしたいんですが、画面共有させていただいていいですかね。

この前段はいろいろあるんですけれども、今年はとても地域の方が学校に入ってきてくださって、まさに参画になってコミュニティスクールがすごく盛り上がったんです。それがどうなっているのかというところなのですが、子どもたちが、ぜひ恩返しをしたい、感謝の会を開きたい。ということで、これ2年生なんですが大豆作りとか、さつまいも作りとかそういうことに関わっていただいた方との関係で、大豆が育ってきていっぱい収穫ができたんです。この大豆で何をするかとなったときに、ただ自分たちで食べるだけじゃなくて、今までの恩返しをして、そして感謝の気持ちを表したいということで、大豆をすりつぶして、きなこ餅を作って、CSの運営委員会の方全員に振る舞いました。そして、全校の生徒にも振舞ったのですが、このクラスにはこういうことお世話になっていますと。

また4年生は、関わっている方、くださった方をお呼びして感謝の会を開きます。地域の方からも感謝状といって、逆に感謝状をもらって子どもたちは本当に大喜びしていました。

地域には関係の素材がいっぱい転がっていて、すごく魅力的なんです。この前わくわくというお話をしましたけれども、身近なものなので、子どもたち、探究を始めるとわくわくしてきて次へ次へとなってくるんです。その手助けをしてもらうのがやっぱり地域の方でもあると思います。

探求していく中で人との繋がりがとても広がっていくんです。そこから子どもたちが、さらに学ぶ、学べる知識とか、教えとかがたくさんあって、子どもたちもすごく喜びます。

そして、最終的に教えてくださった方に感謝の気持ちが出てくるのです。先ほどありましたけれども、さらに次にこういうことをしたいとか、次に繋がっていくんです。そして、人間性とか学びに向かうのがとても深まっていくと。さっき自己肯定感とか有用感とか非認知能力が子どもたち多様な人と接すると広がっていくっていう話がありましたが、まさにうちの子どもたちを見

ていてそれだと思っています。そこに地域の方と接する良さがあるのではないか。なんていうふうに思いました。

そして、今、地域の方からこんな言葉をたくさんいただいています。子どもの笑顔は地域の宝だよとか、元気を逆にもらえていますよとか、そして、この言葉をさらに子どもに返すと、もっと喜んで、もっと地域の方のためになりたいな。なんていうことが出てきます。なので、さらにさらにと活動が繋がっています。まず、今の話を聞いていて、これは本当に価値があることなんじゃないかなというふうに思いました。

以上です。

〇早坂氏

ありがとうございます。

とても素敵な実践を教えていただいたのと、これまでの議論の中の非認知能力を下支えするところの、感謝っていう大事な感情を教えていただいたなと思っています。

今の教育学的にも感謝というのは非常に注目されているワードの１つで、個別にいろいろ言われている自己肯定感とか有力感とか道徳性とか助け合い精神とか自己効力感とか、もう挙げればきりがないくらい、子どもが幸せになるために求められる非認知能力いっぱいあるわけですけれども、かなりそれらに共通してというか、それを1個掘っていくと地下水脈で共通するのは、感謝なんじゃないかというのが、様々な心理学的社会学的教育学的な研究でわかってきていて、感謝されること、そして感謝をするということ、この連鎖が生み出していく、社会性の向上とか、自己効力感の向上、社会的スキルの発達みたいなのが今、感謝っていうワードで教育のプログラムが組めるんじゃないかっていうくらい業界的にも論文とかの研究の世界的にも盛り上がっているんですよね。

今、教えていただいた、きなこ餅の実践いいですね。学校運営委員会が、きなこ餅を配られたらなんかもう嬉しくなっちゃいますよね。この子たちのために今、議論しているんだよなということが何か改めて確認される、すごく素敵な時間になったんじゃないかなと思いました。

ありがとうございます。

さあ、河西さんそして堀田さんという形で、学校現場の皆さんから子どもに対するポジティブな影響のお話、今、伴さんも含めてですね、していただいたところです。いよいよ学校の話がここでかなりクローズアップされてきましたので、論点を最後学校に移して、考えていきたいなと思います。

学校職員の皆さんは、子どもの学びと成長を一番願っている方々、専門職ですから、子どもが幸せになることは、イコール学校の幸せにも当然なるわけですが、それ以外の観点で、例えば管理職の観点でとか、教育課程の編成の観点でとか、あるいは実施の観点でとか、もうちょっと学校の別の観点で、もしかしたらポジティブな影響があるのかもしれません。また、それを裏返すと、前回、お話しいただいたように、地域の方が入ってくることの不安とか迷いとか、それが負担感に繋がっていくってことにも、もしかしたら展開していくお話なのかもしれません。

ここまでも踏まえて、学校に論点をシフトさせて議論していきたいと思うのですが、学校にとってのメリットを語っていただける方いらっしゃったと思うんですが、大きな手が挙がりましたので、塩原さんお願いできればと思います。

今から塩原さんにご報告いただくのですけれど、何となくの雰囲気でなんかかなり重厚な資料が出てきそうな気がしてみたりするんですよね。大事なポイントをぜひ強調しながらお話をいただけたらありがたいなというふうに思います。

〇塩原氏

コミュニティスクール関係の会議や研修で、あまり話題にならないのが、なぜコミュニティ・スクールなのか、というところです。今日は話題提供として、このことについて大町の実践に基づき、発言させていただきたいなと思っております。それはとりもなおさず、学校にとって、コミュニティ・スクールがどういう利点があるのかっていうことに繋がっていくのだと思います。

今、学校にある最大の問題。これは、学習指導要領の円滑な実施と、教員の働き方改革のための指導体制の構築、なんですね。この問題については、いくつかの要素が含まれております。

これは学校単独の努力だけでは解決できません。そうですよね。ですから、学校は改革を進め地域総がかりで問題の解決を図り、子どもが育つより良い地域の学校を目指さなければならなくなります。

学校改革の方向として、学校運営協議会制度を活用した学校作りが提案されているということについて、学校と地域がもっと理解を深める必要があると思います。

新しい学校作りの仕組みに、学校の校長先生方を初めとする学校の職員の皆さんは必要感をもっているかが問題だと思います。

現状はどうでしょうか？学校の方は学校に任せてほしいと考え、内向きな態度をとっている学校もあるのではないかと思います。そのようなことで、先ほどの学校にある、学校が今直面している問題は解決できるかという、そこを考えなければいけないなと思っているんです。

問題について考えてみます。まず、学習指導要領の円滑な実施についてです。

画面二つの理念を実現するための学校改革の対象は、学校の最前線で教育課程を実践し、学習指導に当たる先生方となります。ですから、学校改革の成功の是非は先生方の教育感や授業感が更新されているかにかかっている。

先生などの働き方に焦点を当てているのが画面の問題です。大町市ではこの問題について２つの問いを立て、学校の先生方と考えてきました。現在、行政サイドで行う支援に加え、学校現場では、画面の二つの解決策で対応が図られている。いずれにしても、学校改革によってやる気を高める、働きやすい環境を整えなければならないと思っています。学校改革のベクトルは先生方に向いています。その先生方のやる気と職能を高めるための学校改革はどうあればいいのか、大町市では、その一つの答えとして、美麻小中学校で実現している学校運営協議会制度を活用した学校作りにあると考えています。

コミュニティ・スクールとして指定され、10年が経過した美麻小中学校にできた学校作りのサイクルです。ご覧ください。最初からこのような内容が整っていたわけではありませんが、サイクルが10回転する間に、地域に開かれた教育課程が実現する好循環サイクルとなりました。この好循環サイクルは、学校の日常に大きな変化をもたらしました。これが美麻小中学校に起きた変化でございます。サイクルが回った事により、美麻小中学校の日常が大きく変わりました。

校長先生が作成したビジョンにより、先生方が自主的・自立的に教育活動を行うようになっている。このような取組が変わることで、地域に開かれた教育課程、つまり学習指導の理念が実現しています。十分ではありませんが、学校運営協議会制度を活用したことにより、問題の解決が図られつつあります。

ビジョンに基づく学校作りによって、発現した四つの変化、これから学校運営協議会制度を活用する予定の市町村教育委員会の参考になるのではないかなと思います。

最後に地域の変化について申し上げます。好循環サイクルにより、地域住民の学校づくりへの参画意欲が高まっています。まず、地域学校教育活動への参加者が年々増えている。このことにより、放課後子ども教室の充実が図られ、子どもたちは学びによって個性を伸ばしている。そして、放課後子ども教室は不登校児童生徒の学びの場にもなっております。

また、学校運営協議会委員の皆様がよく研修するようになりました。美麻小中学校の特徴は、学校の自己評価の場合に参加していることです。このことにより、学校運営協議会委員の皆様が、校長先生のビジョンをよく理解して、学校関係者評価に臨むようになっています。美麻小中学校運営協議会の委員の皆様は、学校の自己評価の場に参加しております。これがスケジュール表でございます。表の中の共育展望会議と書いてあるところが、学校の自己評価の場になっておりますが、学校運営協議会の委員の皆様はその場に積極的に参加されるようになってきている。

美麻の実践から言えることは画面の通りです。学校運営協議会制度を活用したことにより、学校の主体性と地域の協力、教育力が高まる。結果として、学校と地域の協働により、地域の教育をデザインする力が高まります。コミュニティ・スクールを実施するにあたっては、地域の実情に合った学校運営協議会の進め方があると思いますが、ゴールとしての地域の教育をデザインする力を目指すことは同じであってほしいなというふうになっております。

〇早坂氏

塩原さんありがとうございました。

ちょっとこれ皆さんそれぞれ感じられたところがたくさんあると思うので、ここからはできるだけ自由に皆さんにバトンを渡したいんですけれど、2個だけ。今回2回のコミュニティスクール検討会が我々の土俵作りというのを狙いにしているので、それぞれが思われているご発言で、共有的な財産を言語化していくプロセスが大事だと思うので私が最初にお話をさせていただきますね。

今、塩原さんのお話で私すごく魂に刺さったというか、若干体が震えたというか、それは最終的には学校の主体性が高まるのだということ。そこがまず一つです。

コミュニティ・スクールに消極的っていうスライドが途中ありましたけれども、長野県は全国的に見ても、コミュニティ・スクール、地域学校協働活動あるいは学校運営の参画という点で言うと、相対的に他の地域と比べて学校に消極的な姿勢が見られる地域だって言ってしまっていいと思うのです。何で学校は消極的になるのか。の理由の一つが、ある種学校の自治権というか、教育は私達に任せておいてほしいというか、我々がやっているここに外部の方が入ってくることで生じる混乱や不安や負担感は今、担えないんだよっていう、ここはすごく大きな課題なんじゃないかなと思うのですが、美麻の実践は最終的に地域の方にバンバン入ってもらったら、学校の主体性がむしろ高まったってわけじゃないですか。

ここはこれから長野で、コミュニティ・スクールの実践を子どものために地域のために学校のために進めていく上でのとてつもなく大きなヒントが美麻の実践には隠されていると思うのです。ただ、塩原さんが最後にサラッとおっしゃいましたが、美麻の実践っていうのがどこまで汎用性を持っているのかというところもちょっと慎重に考えていかなきゃいけないポイントだろうなと思っています。要はあらゆる教育実践は植物みたいなもので、すごいヤシの木が生えているから、うちの冬の国に持っていこうと持っていっても、根が張らなかったりするんですよね。やっぱりその地域にあるからこそ、その歴史や背景、いろんなものが絡み合ってできるのが美麻の実践なんだと。そこも踏まえつつ、でも、きっと参考にできる、未だ消極的な姿勢を保っている学校の皆さんに、コミュニティ・スクールって面白いかもと思ってもらえる、非常に大きなきっかけを皆さんの実践を持っている。その可能性は大きいなっていうのを改めて教えていただいたと思います。

今日このあと実はもう1個、学校の抱える不安とか迷いが負担感に繋がっていくという論点にも皆さんにぜひコメントをいただきたいなと思っていて、今の塩原さんからいただいたお話がすごく大きなきっかけになるように思うのでちょっとここきっかけでいきたいなと思うんですけれど、まず私からちょっと塩原さんに２つ質問をさせていただいて、それをきっかけに、学校が今抱えている不安感ってどうやったら取り除けるんだろう、どうやったらもっとみんなでやっていこうよって雰囲気にこの信州の学校は変わっていけるのかというその糸口をつかみたいと思うのです。塩原さんぜひ教えていただきたいのは今、好循環が生まれていると図がありましたよね。あの循環が生まれたら強いと思うんですよ。もう自走していくというか、持続可能性が見えてくることになるんだと思うんですけれど、このポジティブフィードバックというかあの好循環というのは、どうやったら生み出せるのかということなんですよね。本当に複合的にいろんなものが絡み合っているので、単一の理由をここで述べろと言っても難しいとは思うんですけど、まず一つ言えるのは、この好循環が動き出して、いろんな人が自分で勉強し始めて、研修会にも人から言われずにどんどん出ていくようになって、地域の皆さんがもう学ぶことが楽しくなっているという。このモードに入るのにどれくらいの時間がかかるものなのかというのは、どんなふうにお答えできますかね。

例えば、これからコミュニティ・スクールを始めたいという学校が美麻のような好循環を動かすには、どれくらいの時間を想定しておけばいいのか。何となくの感覚でいいんですけれど、どれぐらい時間かかったと言えそうですか。

〇塩原氏

このことについては、美麻の校長の時にコーディネーターの前川さんとよく話をしました。前川さんには、地域の人はじれったいだろうけれど、学校に主体性が芽生えてくるには３年はかかるよって伝えました。結果として、やっぱり３年ぐらいかかりました。

学校に主体性が芽生えると、先ほどの好循環の図にありました通り、先生方の授業が変わってきます。すると子どもたちが育ってきて、その育った子どもたちを地域の人たちが交流の中で、実感する。それが3年。その後、地域の方々が学校に非常に関心を持つ。そうすると、３年ぐらい経って地域の人たちの研修意欲が高まっている。だから６年くらい。

〇早坂氏

ありがとうございます。これはとても大きなヒントになると思うんですよね。

要は一朝一夕に進む話ではないっていうのは頭で理解していても、地域の人としてはどれくらい学校とともにあろうとして、でも、なかなか意識が地域に向いてくれない学校と、片思いを続けなきゃいけない時期ってどれぐらい覚悟していればいいんだろうということなんですよね。

３年で意識が変わっていって、そのまた変わった意識の中で子どもたちの成長、学びも変わっていて、それを見た地域の人たちもまた変わっていってというこの好循環は、一つのモデルケースとしてお手本として、これからも引き続き皆さんには信州の先頭に立っていただけたらなと思うところでございます。

さあ、皆さん残りが30分弱というところで、ここまでを踏まえてどの観点からでもお感じになったことをどんどん出していただく時間に最後はしたいなと思います。そのときにちょっと念頭に置いていただきたいことは、誰にとっていいかコミュニティスクール、その誰のところ。地域なのか子どもなのか、学校なのか、あるいはそれを総合した形なのか、ということを意識していただきたいのと、今、ちょっと慎重で消極的な学校、不安を抱えて場合によっては負担感を抱えてしまっている学校が、この不安感を充実感に変えていく、何かそんなきっかけみたいなもののヒントを今日いただけたら2回目の土俵作りとしては、もうほぼほぼパーフェクトというか予想以上の収穫だと言えると思うのです。ということでその辺を意識しながら、どこからでもフリートークでいかがでしょうか皆さん。早速、伴さんありがとうございます。お願いします。

〇伴氏

塩原先生のお話を受けて。実は私、今日この会議の直前に関わっている上田市立北小学校の校長先生とお話をしました。校長先生に「どういうことがあって北小学校のコミュニティスクールが、今の状態、地域の人たちとの交流が起こって進んできたと思う？何がよかったと思う？」って聞いたら、校長先生こんなふうにおっしゃったんです。

学校の願いを受けて、自然な形の交流が行われるようになった。地域の人たちが押し寄せてこなかった。自然な交流が生まれることによって、先生方が良い授業作りができるようになったり、自分の願いが地域の人たちの助けによって、思っていた以上の成果がもたらされるようになった。それから、地域の人たちが押し寄せて行かなかった大きな原因として、コミュニティルームを作ってもらって、大人たちは支援をするために学校に行っているのではなくて、自分たちの教室だから、自分たちの学びたいことを楽しくわくわく学び始めて、その後ろ姿を学校の先生や、それから子どもたちが見るようになることで、温かなそれから自然な交流が生まれるようになった。やっぱりそれには3年くらいかかった。校長先生からのお話でした。

〇早坂氏

ありがとうございます伴さん。

すごくタイムリーな形で、校長先生とお話してくださったんですね。何となく想像するに、いやそれは伴さんのおかげだよって話が出たんじゃないかなと思いますが、それは出なかったんですか。多分出たと思うんですけど。なるほど自然な交流というところですね。

地域の方が押し寄せないという言い方で伴さん柔らかくおっしゃっていただきましたけれども、要は学校にも受け入れる準備というか、その受けられるキャパシティがあって、それを超えた形で地域の方に来ていただいても、それはちょっと無理ですよね。被災地がまだまだ復興を大変な思いで、皆さん被災された中で生活を送られていて、長野大学からもボランティアの学生がバンバン出ていますが、無条件で大量のボランティアが必要かというと必ずしもそうじゃなくて、必要な時期に必要な場所にとか。何か関係性として非常に似ているところもあるのかなと思ったところです。なるほど。この自然な交流。校長の願い。そして、それが循環していくには先生が変わって、先生の思いも変わって、子どもも変わって、子どもが変わると保護者も変わって、地域の人がまた笑顔になって、こうやって循環していくのには、やっぱり少なく見積もって３年ぐらい。この３年以上かけて動いた動きを継続していきたいところですよね。また、持続可能性については次回以降の課題になるかなと思いますが、ありがとうございました。

他いかがでしょうか？

〇河西氏

前回共有した中の一つの資料ですが、さっきお話したプラスのフィードバックによって子どもたちがやる気になるということの図ですが、ここで、地域にとって、コミュニティスクールが、どんな意味があるかと言ったときに、私が考えるのは、地域の人たちも自分たちが子どもが育つことに関わっているんだということを実感するということかなと思って、そのときにやっぱり重要なのが、地域の人も、先ほど横並びだとか、感謝という言葉がありましたけれども、それを与えることが重要だと自覚していることだと思うんですよね。

そうすると、このありがとうとか、笑顔とか、助かったよまた頼むねっていう、その感謝に関わる本気のフィードバックを自分たちが子どもたちに関わったそのときに返してあげることが自分たちの役割だって知っていることが重要じゃないかって思うんです。そのために、この一番上

に書いてある子どもと地域の必要感を重ねるということが、外せない。地域が自分たちの必要感に乗っかったところに子どもたちも全力で関わってもらえると、自然と本気のプラスのフィードバックが返せるんです。だから、この地域の必要感と子どもたちの必要感が重なることが重要なんだっていうことが、子どもたちの学習の意欲に繋がる根本にあることを前提に話をすると、この繋がりがわかると、教師は何をすればいいかがわかる。

教師は何をすればいいかっていうと、地域の本気のプラスのフィードバックに繋がるための地域の必要感って何だろうってことを把握すること。それを地域の人から子どもたちに伝えてもらう機会を作ればいい。その上で、子どもたちがお手伝いって言葉があったけど、地域の人も手伝いでは駄目だし、子どもたちもお手伝いじゃ駄目だから、子どもたちが本気で自分のこととして関わるための課題を設定するためのお手伝いを、教師は授業で行う必要がある、と理解できる。

このことが、理解できてくると、不安感という言葉がいっぱい出ているんだけど、先生たちも自分たちが何をすればいいのかわかれば、不安感も消えるし、どこまで関わってもらえるかもこれでやると、そんなに悩まなくて、進められるんじゃないかなっていうのが、これまでのこの理屈でやった地域連携における、実践の姿かな。と私は思うので、今まで議論中で、この必要感を重ねるという部分も、ちょっと考えてもらえると。そうすると、美麻の実践がなぜ上手にうまく回っているのかその根本にもおそらく、ここは、きちんとできていると思うんですよね。地域の必要感と違うことをおそらくやってないんじゃないかなっていうふうな気がするんですけど、いかがでしょうか？以上です。

〇早坂氏

ありがとうございます。スライド残しておいていただいていいですか。すごく、今も刺さりました。前回と同じスライドですがまた別の光を与えていただいた感じで、この真ん中の黄色がやっぱり、魂ですよね。この本気のプラスのフィードバックを地域の人が子どもに与える役割が自分たちにあるんだと自覚してもらうこと。さっきおっしゃいましたけれど、そこですよね。だから地域の人って、ただ地域に住んでいるおじちゃんおばちゃんではなくて、自分は教育の当事者なんだっていう自覚をもって、自分たちの役割って何なんだろうかということをしっかり認識してもらって、本気で子どもたちにありがとうを言っていくという。

そうなっていくと何て言うんだろう。大人にも多分大人の階段みたいなのがあるのだと思います。ただ地域に住んでいる人みたいのが1段階目だとすると、何となく教育に興味を持ってとか学校に出かけてお手伝いしてみたいにだんだん階段上っていって、本気のプラスのフィードバックをすることが自分の役割なんだと気づいて、市民性を高めていく段階って、結構上の人なのかなって。そういった人たちが今、河西さんがお勤めの松本の学校にはいらっしゃるのかなって。

だから、さっき地域は待たなきゃいけないってお話が、片思いの時期が６年ぐらいあるみたいなお話が美麻の実践でありましたけれど、これ逆に学校も同じなんじゃないかなっていうのをちょっと今教えていただいた気がしますね。

地域の人に認識してもらって自分の役割を自覚してもらう。要は階段を一緒に上がっていくということを時間かけてやっていく必要があるのだろうなって。その中で学校の先生も自分の役割が変わっていくわけですよね。今まで教科書を教えていた学校の先生がちょっと違うぞって。もちろん教科書の内容も教えていくけれども、それ以上に今、自分に求められていることは何かというと、地域の方からもらった地域の必要感。これをまず子どもにちゃんと共有してもらう場を作っていくこと。地域と学校、子どもを繋いでいく場所を作っていくこと。この場を作っていって、子どもと地域の人たちとの本気のぶつかり合いを安全安心な環境の中で提供していくという方向に学校の先生の役割が多分変わっていくと、それが変わっていくと、なんで地域と繋がらなければいけないのとか、なんで地域の人が学校運営に参画するのみたいな不安は、そのプロセスで払拭されていくってことですよね。なるほど、ありがとうございます。

〇河西氏

一つ付け加えると、この役割分担がわかると、もしかしたら３年は必要ないかもしれないなっていうのも聞いていて思いました。

〇早坂氏

既に市民がいろんな地域作りの活動とかで成熟してたり、市民性が高かったりすると、確かにいくつかのプロセスはすっ飛ばしていけるような気もしますよね。何となく感覚で言うと最短どれぐらいで行けそうですか。

〇河西氏

本校の３学年に関してならば、今年１年間で相当地域との連携っていうところでのこの喜びを味わうところはできたかな。ただ、そのために必要だったのは、塩原先生がおっしゃっていた、教師が、子どもたちの思いを大切にしなきゃいけないっていう根本的な部分を、私今年ここ来たんですけれども、それ以前のところから、もう積み重ねていた。ていう経緯があります。３年生がやったので、１年２年生のところで、先生たちがそういう授業を作り上げていたことによって、この理屈も先生たちは受け入れやすかったっていうのはあったかもしれません。それがあったから１年ぐらいで相当進められたっていうこともあると思います。

〇早坂氏

料理で言うともう煮込んだ鍋がありましたって持ってこられたところもあるかもしれません。

いやでも面白い。もう１個だけちょっと教えていただきたいのが、だとすると、そういう好循環が例えば最短で１年。下準備があれば１年、まあ、３年ぐらいかかる。そのプロセスの中で、校長に求められることってどういうことになると思いますか。そこはやっぱり役割がこれまでの学校運営の仕事とは変わったイメージをもたなきゃいけないということになることなのかなと思うのですが。

〇河西氏

そこについて明確に私も理解しているかと言われると、そうじゃないかもしれないんですけれども、グランドデザインにおいては、もう学校は地域とともに歩まなくてはこれから存在しな

い。生きていく道はないんだという思いを、今年来た最初のところで、先生たちと共有しました。グランドデザインの柱にやっぱり地域連携があって、そこを外して我々、子どもたちを育てるということはおそらくできない世の中になっていくよということは共有しました。

〇早坂氏

ありがとうございます。まさにそのビジョンを示すってことですよね。さっき伴さんの言葉には校長の願いっていう言葉もありましたけれど。ありがとうございました。他にも何か多分もう喋りたくてしょうがない方がいっぱいいるんじゃないかなと思うんですけれど、いかがでしょうか？

〇堀田氏

今の河西さんの話とも重なるところもいっぱいあると思うんですけれども、まず学習指導要領で、目指す姿で社会に開かれた教育課程というのがあるんですね。こんなこと言うと、長野県の学校の先生に反感を買うかもしれないんですけれども、結構まだ社会に開かれてない学校がいっぱいあるんじゃないかなと。先ほどの早坂先生の話にもありましたがそんな実感があります。

自分で思うことがあったのでいろいろお話させていただきます。先日、松ヶ丘小学校である会議がありました。それは長野圏域のシニア活動ネットワーク会議というもので、実は松ヶ丘小学校の今年のCS活動が盛んになったということで、シニア活動推進コーディネーターという方がいるんですけど地域に。斎藤さんという方が学校と地域とをいろいろ繋げてくださったところもあるんですね。その方がぜひ松ヶ丘で会議をしたいということでこの会議が初めて学校で開らかれました。うちの学校で開いてもらいました。授業公開したりとか、実践を話したりとかいろいろする中で、こんな意見をいただきました。

例えば、「学校との繋がりを持ちたいんだけれども、学校はとても敷居が高い。なかなか繋がれない。どうしたらいいんでしょう。」または、「活動をしたいと言って申し出たんだけれども、忙しいと断られてしまった。」どうやって入っていってていいかわからないという悩みをいっぱい聞きました。

それを聞いて、そうだよな。やっぱ敷居高いんだなと反省するところもたくさんありました。逆に学校は地域とどう繋がったらいいんだろうかという不安もあったり、やることもとにかく、教科学習もあったりとか、子どもを見なきゃいけないしとか、やることはいっぱいあって、地域との活動ばっかりはやっていられないっていう、悩みもあります。けれど、地域と繋がることは大事だっていうことはわかっている。

どうやって開いていったらいいんだろうと考えたんですが、今年実践してみたんです。そもそも、どう開いたらいいかというところをスタートにしたら、全く進まないなと。そこじゃなくて、もう開かなきゃいけないんだよ、地域に。受け入れましょうっていうところを、スタートにする。そしたらとてもスムーズにいきました。その中でやっぱり不安になるってことは、いっぱいあるのだけれど、とにかく失敗してもいいし、うまくいかなくてもいいよ。まずはやってみましょうという。守りだけじゃなくて、成功しなくてもいいから関わりをもってやっていきましょ

うと。そしたら、どんどん繋がりができてきて、先ほど河西さんが言ったように、道筋が見えてきた。こうすればいいんだ、今度はああすればいいんだと先生方もわかってきて、本当に活発に活動が進んでいきました。そこまでくると本当に子どもも先生も流れに乗っていけるし、地域の人もそこにどんどん入ってきてくださると。このまずスタートラインをしっかり開かれているんだよってことを示さないとやっぱり地域の方も入ってきづらいんだなっていうことが、ネットワーク会議のところで本当によくわかった。学校側もそういう意識を本当に統一してやっていかなければいけないんじゃないかと実感しています。
以上です。
〇早坂氏
　ありがとうございます。
　冒頭、今日の議論の出発点で城村さんのお城という議論ありましたよね。学校ってお城なんだというね。いい意味でも、災害があったときはみんなでそこで地域をもう1回立て直すときの拠点になるっていう意味のお城でもあるんだけれど、お堀があって中に入れないというのは、そのネガティブな意味合いも多分行間にひそませたんじゃないかなと私は勝手に思っているんですけど城村さんいかがですか。
〇城村氏
　先ほど来、前回もそうですね。第1回目もそうで、この学校運営参画を地域の住民がやることで子どもたちの自己有用感だった自尊感情が高まるよねという話があります。
　これは、僕は地域住民、大人もそうだと思っています。言うなれば地域の企業人もそうですね。多分この辺はね傳田さんが一番身近で感じてらっしゃるところかなと思います。僕自身もやっぱり現場の教育に関わっている、地域の人間として関わっているとやっぱりすごく感じます。このライブを先生方で聞いている方もいらっしゃると思うのですが、地域の住民として期待したい、お願いしたいことは何かっていうと、教育の場を独り占めしないで欲しいなって思っています。
　教育の場を先生方だけで独り占めしないでって。これ本当に思いますね。これからは多分、先生方、パラダイムシフトが本当に必要で、学校における教育というのは教職員のみがやるんじゃなくて、地域住民であったり地域の企業人であったりっていう、そこで一緒に作っていく。それもセットだと先ほどちょっと話がありましたが、多分そこはもう決めないとなかなか進んでいかないだろうなって。地域の人間としてもなかなか入りづらいのは事実ですね。やっぱり大人ですから先生方の都合もわかりますので、迷惑かけたくないですから。
　でも、グランドデザインに描きました。だから学校はこうです、だからどうぞというぐらいの強いメッセージがないと、実際問題としてはなかなか入りにくかったりするのかなと思っています。
　地域の人間として住民として学校に入っていくとなったときにそんなに難しいこと考えているわけではなくて、そこにある大人が感じる自己有用感であったり、自尊感情の高まりが何かとい

うと、自分がそれまでしてきた専門性、仕事というものは、今日参加されている皆さんもそうだと思うんですけど、もう順風満帆で何もなかったことはないんですよ。皆さんそれぞれ挫折して、悔しい思いをして、涙流しているんですね。その経験を通して子どもたちに出会っていくんです。その経験を通して子どもたちに出会っていったときに、自分が流した涙はこの子たちのためだったんだって気づきがあるんです。僕らサイドにですね。だから、ありがとうが生まれてくるんです。あなたと出会えてよかったよと。私あのときこんな悔しい思いをして、起業して、会社を経営して、あるいは農業やってこんな大変なことがあった。すごく悔しかった。つらかったって。でも、あのときの涙や悔しさってあなたたちと出会うためだったんだね、ということはものすごく大事なんです。これはもしかすると学校の先生方とは違うところの光で、我々、地域の人間だからこそ照らすことのできるところだったりするのかなと思うんです。

ですから、学校っていうのは、決して地域だけが学校を作っていくことじゃなくて、学校も地域を作ってくれること、先生方も地域の人たちを育てていけるっていうところは、ぜひ先生方の新たなプライドとして誇りとして感じていただけると関わる私達の立場とするとすごく嬉しいなと。同じビジョンを掲げて夢を叶えていけるかなってそんなふうに感じています。

以上です。

〇早坂氏

今日のキーワードというかもうキャッチフレーズ、教育の場を独り占めにしないで欲しいっていうのは、これ旗にしたいですね。いやあ、ありがとうございます。

今、傳田さんも深く頷かれているところですが、地域の立場で一言あればぜひ重ねていただけたらと思いますがいかがですか。

〇傳田氏

何か皆さんのお話をうんうんて聞いていて、その通りだなと思っていました。

ただ一方で、本当にＷｅｌｃｏｍｅというふうにしたいんだけれどもできない。

もしくは、何かあった時とか、ブレーキは誰が踏めるのかとか、そういったこともどこで補完してくかっていうのも同時に考えて仕組み化していかないといけないと思っています。それを先生方がすべて考えるところになったり、先生方の責任になるということもまたちょっと違うんじゃないかなと思うので、理念としてはものすごくそうだなと思うのですが仕組みとしてはどういうふうに落とし込んでいけば、社会実装できるというかいろんなパターンがあるので、そういったことを担保していく仕組みっていうのは、これからまた考えていきたいなと思っています。

〇早坂氏

すごく大事なポイントで、その点でいうと、例えば、上沼さん。もう既に歴史的にその学校でもない、家庭でもない、ある種地域のハブとして公民館が歴史を持っているわけで、公民館という歴史ある物を繋いでいく場としての機能みたいなものが、例えば城村さんみたいな非常に熱意があって一緒にやってくんだという人と、それを迎え入れるだけの準備を整えつつある学校と、

そこの間に入る公民館みたいな役割でいくと、何か公民館の可能性でまた一つ別の光も当たってくるのかな。なんていうふうに思って伺っていたんですけど、いかがでしょうか？

〇上沼氏

やっぱり公民館としては何かあれば気軽に学校の方から相談してもらいたいですし、また一緒に作っていけたらなという思いはもちながらみんな仕事をしていると思います。

当然、地域側としてもできれば頼まれたときだけ行って何かお手伝いというよりは、一緒に作っていく段階から関われれば、当然関わる側の当事者意識も高まりますし、そこで子どもの成長を垣間見られる機会があれば、地域側、それに関わる方にとっても非常に大きなやっぱり学びでもありますし、自己肯定感につかまり繋がりますし、それがまた地域の持っている力をすごく高めていくことになるかなと思っています。

いろいろ調整で現場の公民館主事は苦労することもあるかと思うのですが、できれば、どんなことでもいいので気楽にまず相談していただけることがありがたいですし、市内の学校でも、もう校長先生、教頭先生と公民館長と主事が定期的に学校で話し合いをするような機会。一緒に給食を食べながら話をするような機会も出てくる中ありますので、そういったやっぱり風通しのいい、常日頃からそういう関係を作っていければいいのかなと思っています。

〇早坂氏

先ほど、塩原さんからも資料の中で、ご説明があったところですけれども、最終的には地域の方に参画してもらって一緒にやっていくことは、働き方改革を推進していく。要は、本来学校がやるべきことにエネルギーを集中するためにも繋がっていくと。要はもう日常忙しすぎて地域連携どころじゃないんだよという現実がこの信州、いろんな学校であるというお話は堀田さんも先ほど説明してくださいましたけれども、実はその先に地域と繋がった、その先ゴールのところには、本来、先生が本当にやりたかったお仕事が、待っているんじゃないかなという気がね、今日皆さんのお話伺っていると思いましたよね。

うまく繋がっていけば地域には、城村さんのような非常に熱い思いで、もう独り占めせずに一緒にやっていこうという思いもありますし、学校には一緒にやったことで地域からの本気のフィードバックが子どもに与えられて、それが教育効果を高めていくという河西さんの実践でのご報告もありましたし、またそれは、伴さんの北小学校での実践、塩原さんの美麻の実践でも確認できるポイントなんじゃないかなと今日は思ったところでございます。

第1回に引き続いて、時間があっという間すぎてもっとですね、お話をしたいところではございますが、今日も、もう閉めなければいけない時間となってしまいました。

ただ、当初の目標である我々の共通の土台、なんで私達は学校運営参画を考えていかなきゃいけないのか、これからの教育を考えるときに地域と一緒にやっていくことが大前提となるのは誰のためなのか、この辺の共通の土台は見えたんじゃないかなという気がしてきています。

これらをちょっと踏まえてですね。また事務局の皆さんは今日の多様な議論をまとめるのにすごいエネルギーを使うことになるかとは思いますけれども、ぜひ今日の議論で皆さんからいただ

いた多様なご意見を余すことなく、３回目以降の具体的な議論に繋いでいきたいなと思っております。

本日も非常に熱心に、またそれぞれが強い当事者性を持って、本質的な議論をしていただけたことに、座長として皆さんに御礼申し上げます。ありがとうございました。

それでは事務局にお返しをしたいと思います。今後に向けてのいろんなご説明もあろうかと思いますので、それでは事務局に皆さんお願いいたします。

〇岡田課長

どうもありがとうございました。

参考までに報告させていただきます。本日のライブ配信ですが、最大で約50人弱の方の視聴をしていただいております。皆さん、やはり興味を持っていただいているというところ、そんなところからも実感できるのかなと考えております。

本日お出しいただきましたご意見は事務局で整理をさせていただきまして、次回に生かしてまいりたいと思います。

第３回の検討会ですが５月にまたこのリモートの形で実施を予定しております。また日程調整の連絡をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして第２回の検討会を閉会いたします。